

京都方言の形態・文法・音韻(3) 一 会話録音を資料として(3) 一

中井 幸比古

目次

要旨	77
2. 37 「知らん」など一疑問の要素とともに使われた場合の文法化一	82
2. 38 「知れん」など一疑問の要素とともに使われた場合の文法化一	89
2. 39 「わからん」など一疑問の要素とともに使われた場合の文法化一	89
2. 40 カイナ・イナについて	91
2. 41 カナ・カナ一について	94
2. 42 用例: 「知らん」「知れん」「わからん」など+疑問の要素	96
2. 43 ヤンの音調と用法一「京都方言の形態・文法・音韻」(1)2.30.2・2.30.3節の補足一	100
2. 44 連用命令・テ形などに付くナとヤ一「京都方言の形態・文法・音韻」(1)2.29節の補足など一	101
2. 45 志向形に付くナとヤ	105

要旨 本誌第1号・第2号に続き(第3号は不掲載)、会話資料kyodanwaに基づく京都方言の記述を行う。

2. 37 「知らん」など一疑問の要素とともに使われた場合の文法化一

2.37.1 ねらい(略)

2.37.2 アクセント シランの動詞本来のアクセントはH0だが、H1, L0になることがある。Kyodanwaでは、L0はシランL0カオH0(～をずる)という成句でのみみられる。シランのH1は、kyodanwaでは、文法化が進んでいる場合(2.37.3(A)(B))に限ってみられる。

シランの前の文節末尾の助詞のアクセントについて。前の文節に助詞のカ・ヤがつく場合、ヤは低接で一貫。カは「疑問語」・「疑問語+ノ+名詞」に付く場合は低接、それ以外は順接で、ほぼ例外がない。但し、カは順接が予想される場合も、共通語で低接する環境では下の世代では低接が増えており、その萌芽かと思われる例が2・3ある。付属語なしにシランが続く場合(例: どないH0 しょH0 しらんH0[どうしようかなあ])通常の文節連続と同じで、シランが低接することはない。シリマセン・シリマヘンのアクセントはH0のみ。

2.37.3 シランの意味用法別の用例数と考察 意味用法別に用例数を一覧し、その中でシランの文法化が進んだ用法として、(A)(B)(C)3項目をとりあげて考察した。

(A) 疑問詞+[カ・ヤ]シランの副詞的用法

共通語の、副詞的なナニカシラなどとほぼ同じ用法として、ナンヤL2シランH1, H0、ナンカL2シランH1, H0などが現れる。共通語のナニカシラなどに比べて、会話での使用頻度が高い。

(B) [カ・ヤ・ゼロ]シランの形で共通語の文末詞カシラにやや近い用法

この用法のシランのアクセントはH1, H0。前にカがついた場合カは順接、ヤが付いた場合ヤは低接。但し、カは下の世代で低接に変化。大阪落語.txtに限って、少数ながら、志向形+カの後にシランが低接する例がある。京都と同じカ順接・シランH1の例も多い。シランの末尾拍が上昇する例はない。共通語のカシラの末尾が上昇調を持ちうるのと異なる。語形は、シランのみでシラはほぼ現れない。

		体言・ノ+	活用語終止連体形+
疑問語あり	カ	[疑問語]…[体言・ノ]カシラン	[疑問語]…[活用語終止連体形]カシラン
	ヤ	[疑問語]…[体言・ノ]ヤシラン	—
	ゼロ	—	[疑問語]…[活用語終止連体形]シラン
疑問語なし	カ	…[体言・ノ]カシラン	[活用語終止連体形]カシラン

一般の補足節の場合は、疑問語なしの場合の使用が限られること、疑問語ありの場合、「[疑問語]…[活用語終止連体形]ヤ+動詞」の形も可能である点が異なる。文法化に伴うカへの収斂が起こりつつあるのだろう。より下の世代では語形が共通語に近づき、シラでなくシランを使うなら、シランの前はカで完全に統一され、アクセントはカシラン全体が1単位として低接。

性差については男女ともに用例がみられ、共通語のカシラのような女性語的色彩はない。

意味用法に関する共通語との相違点は、以下の4点である:(α)問いのナ性が共通語のカシラより弱い、(β)応答で使用されることが稀、(γ)「と思う」と共起可能、(δ)連用修飾節的な用法を持つ。

(α) 問いかけ性の弱さ ラオハブナキット(1998)は、共通語のカシラにつき、本義の「不定自問」に加えて、より問いかけ性が高い①「自問的問いかけ」、さらに問いかけ性が高い②「疑似問いかけ」の用法を持つとする。①②とも、積極的な問いかけの意味を持つ場合、カシラの末尾拍(全部またはその後半)を上昇させることもある。一方、京都方言の[カ・ヤ・ゼロ]シランも不定自問を本義とするが、末尾拍が上昇することがなく、少なくとも②疑似問いかけの用法を持たない。

(β) 応答での使用 京都方言の[カ・ヤ・ゼロ]シランが応答で用いられることはほとんどない。一方共通語のカシラは応答で使用可。

(γ) 「と思う」との共起 京都方言の[カ・ヤ・ゼロ]シランは「思う」と共起可能である。kyodanwaにも例が多数ある。

(β)(γ)も、[カ・ヤ・ゼロ]シランの問いかけ性の弱さが関係している。[カ・ヤ・ゼロ]シランは元来問いかけ性がなかったはずで、問いかけ性の強さの点で、共通語のカシラの方が文法化が進んでいると言える。

(δ) 連用修飾節的な用法 京都方言の[カ・ヤ・ゼロ]シランは、文末ではなく、連用修飾節的用法がかなりある。

下の世代のブログ類などにカシランが現れる。「関西弁」かどうか、話し言葉で使われるかどうかについて調査が必要だが、問いかけ性が高い例も許容されるか。イントネーションが「上がる」場合もあるという。共通語のカシラの女性語的色彩を嫌って、古方言の語形カシランをカシラの代用として再利用したものか。

(C) 共通語のカモシレナイにやや近い用法

共通語のカモシレナイの京都方言の対応語形はカモシレン(丁寧体はカモシレマヘンなど)だが、これらはほとんど現れない。カモワカラ(カモワカリマヘン、カモワカラシマヘンなど)を多く使う。それに加えて、カモシランが少数ながら現れる。yahoo 検索ではカモシレンが多量に現れるが、これは、最近の共通語の影響によるものだろう。

カシランが疑問語を伴わず、ケドが後続する場合(言い切りは不可)、意味がカモシレナイケドに接近した例が多数見られる。例:[今の若い人は] あいでH1[あれで] ええのかL2 知らんH0 けどH1[私には抵抗がある]。共通語でもカシランケドをカシラナイケドとすれば使用されるようである。

2.38 「知れん」など疑問の要素とともに使われた場合の文法化

シレン・シレヘン・シレマヘンはほとんど現れない。わずかに、カモH1 シレンH0・カモH1 シレマヘンH0で、共通語的な話し方をする話者・下の世代の話者に少数現れるのみ。現代京都方言でシレンを単独で使うことが少ないことと関係しよう。

2.39 「わからん」など疑問の要素とともに使われた場合の文法化

ワカランのアクセントはH0とH2の両方が現れる。H2は古形の保存。ワカリマヘンは全員H0で統一。ワカラ(+シマヘン・ワカラ(+シマセン)は、全員H2またはH2+H0。

副詞的用法、疑いの文末詞化に近い用法(2.37.3節(A)(B))はない。共通語のカモシレナイにやや近い用法(2.37.3節(C))について:カモシラン・カモシレンはkyodanwaには少数しか現れなかったが、カモワカラヘン(カモワカリマヘン…)が多量に現れる。また、カシランケドをカモシレナイケドに近い意味で使う例が多数あったが、カワカランをカモシレナイに近い意味で使う用例はわずか2例のみ。この用法につきシランの場合はケド類の後続が必須であったが、カワカランについては、ケド類は後続してもしなくてもよい。この用法に限らず、シランはケドが後続する例が非常に多い。

2.40 カイナ・イナについて

2.37(B)で述べた[カ・ヤ・ゼロ]シランの類義表現に、カイナ・イナ、カナナ・カナ、ヤロカなどがある。このうち、カイナ・イナ(本節)、カナナ・カナ(次節)を扱う。

カイナのアクセントはH1だが、ナをやや長く引くと「カ'イ「ナ」ー(カイ+ナーH1+H1)となることがある。ナが短い場合、末尾拍が高くなる例もある:「カ'イ「ナ(カイ+ナH1+H0)。イナのアクセントは、イナL(低接非上昇)または、イ+ナL+H1('イ「ナ」)、イ+ナーL+H1('イ「ナ」ー)。ナが短い場合、末尾拍が高くなる例もある: 'イ「ナ(イ+ナL+H0)。ナを引く例は比較的少ないので、以下、カイナ・イナで語形を代表させる。意味用法とアクセントとの関係は2.40.2末尾を参照。

カイナ・イナは、デスマス体でも常体でも使える。[カ・ヤ・ゼロ]シランは常体のみだから、それよりは独語的性格が弱い。カイナ・イナは推量のヤロの後に付いた用例がない。

カイナ・イナの使い分けの条件について。イナは疑問語とのみ使われる。カイナは疑問語とは使わないのが原則(表中の①②)だが、疑問語と使われた例(①'②')も少数ある。より下の世代ではイナが廃滅して疑問語の有無と無関係にカイナを使う人が増え、さらに下で

はカイナという語形自体を使わなくなっていると思われる。それと関連があるか。

	体言・ノ+	活用語終止連体形+
疑問語あり	①[疑問語]…[体言・ノ][ヤ・ドスなど]イナ(①' カイナ) ① ” [疑問語]カイナ	②[疑問語]…[活用語終止連体形]イナ・(②' カイナ)
疑問語なし	③[体言・ノ]カイナ	④ [活用語終止連体形]カイナ

このうち、①[疑問語]…[体言・ノ][ヤ・ドスなど]イナについて、ヤ・ドスなどが無い場合はカが必須(①')。但し、この①'の形が共通語の影響を受けたものかどうか不明。反語の場合イナはなくカイナのみ。カイナは男女とも用例がある。また丁寧体・普通体とも使用可。

2.40.2 カイナ・イナの意味用法について。

カイナ・イナは、問いかけ性について[カ・ヤ・ゼロ]シランや共通語のカナよりも広範囲の用法を持つ。また、単純に問いかけ性の大きさだけでは説明できない用法もある。応答にも使われる。上述デスマス体での使用とともに、独話的色彩の弱さを示す。なお、カイナ・イナは男女とも使用例がある。

カイナ・イナは、話し手がすでに持っている知識・記憶・過去の経験と照らし合わせてみて、不明確な点や不一致が生じた場合の疑いが中心的な意味だと考える。疑いだけでなく、反語(下記⑤)・非難(⑤の一部)・驚き・感嘆(下記⑧)などの意味が派生することがある。一方、カナ・カナーは、話し手がすでに持っている知識・記憶・過去の経験と関係があってもなくても、話し手が発話時点で抱いた疑い・自問が中心的な意味であると考えられる。

①疑似問いかけ カイナ・イナには明確な2人称主語の疑似問いかけの用例がない。もしカイナ・イナを使うと、聞き手側の事柄について、話し手側の知識・記憶・過去の経験を前面に出すため、失礼な印象が生じたり、強い疑いとなったりするからではないか。

②自問的問いかけ 2人称以外の主語の自問的問いかけの例は多くある。ただ不定自問に近い。2人称と異なり、話し手側の知識・記憶・過去の経験を前面に出しても不都合がない。

③不定自問 用例多数あり。

④副助詞的用法のカイナ カイナが文末以外に現れ、名詞に付く。カイナを除いても文が成り立つ。カイナのアクセントは有核についたときにはそのまま低く平らに付くのが普通。「言う[ユー]」が後続する場合が多く、その場合トカの用法に近づくが、トカは本来伝聞の意味なのに対して、カイナは自分自身の記憶の不確かさを示す点が異なる。例：宗旦狐[ソータンキツネ]かいな H5 言うのが H2 相国寺[ソーコクジ]に L3 住んでて L3。

⑤反語・強い疑いのカイナ 反語・強い疑いのカイナは、イナの形がなくカイナのみ。一般に反語の意味では、疑問語の有無、丁寧体か否かと無関係にカ L またはカイ H1 が必須であることと関係するか。反語としては、カイ H1・カ L だけより柔らかい。カイナが持つやや自問的性質のため、反語のカイ・カは丁寧体ではあまり使われないのに対して、カイナは丁寧体でも使われる。反語・強い疑いのカイナは、聞き手への応答として現れることがある。

⑥不確かな応答 応答に使われる場合、安達(2002)が「不確かな応答」とする用法は可能と思われるが、たまたま kyodanwa に用例がない。なお、述べ立て文に近い「個人的な判断・意見叙述」(ラオハブナキット 1998)ではカイナは使えないようである。

⑦ヤンカイナ ヤンカイナの形で、ヤンカ単独が持つ、「認識形成の要請」「共通認識の喚起」「伝達」といった意味を持つ。詳細は、本誌第1号所収の、(1)2.30.2節参照。下の或る世代ではヤンカイナの方が多らしい。

⑧あいづち 「そうかいな/そうどすかいな」などであいづちの用法があるが、「そうか/そうどすか」に比べて、驚き・感嘆の意味合いが加わるように思われる。

上記①～⑧の意味用法と、カイナのアクセント・ナ長短の関係について、④副助詞的用法⑤反語・強い疑い⑦ヤンカイナ⑧あいづち(驚き・感嘆の場合)はカイナ H1 のみであって、カイナ H1+H0(ナ高接平坦)やカイナ H1+H1(ナ高接下降)は現れない。またこの④⑤⑦⑧では、起伏型の語につくと、低平に近く、H1のアクセントが顕現しないことが多い。一方、④⑤⑦⑧以外の用法では、カイナ H1、カイナ H1+H0、カイナ H1+H1 のすべてが可能であって、かつ、起伏型の語についたときもアクセントが顕現するが多い。

なお、カイナからナを落としたカイだけは、⑤反語をのぞき、kyodanwa には用例がない。

「と思う」との共起 カイナは「と思う」と共起可能である。

連用修飾節的な用法 [カ・ヤ・ゼロ]シランと異なり、連用修飾節的に次に続くような用例はない。次に続くようにみえる場合は、独話

的な表現の挿入の性格が強いように思われる。

2. 4 1 カナ・カナーについて

2.41.1 カナ・カナーのアクセントについて。カは低接・順接の両方の用例があるが、kyodanwa の中の上の世代では順接が多い。下の世代で低接が増加している。ナ・ナーはH1（高接下降）が多いが、ナ・ナーH0（高接平坦）になることもある。カナ・カナーのナ・ナーはつねに高接平坦・高接下降である。カイナ・イナと異なり、ナ・ナーの部分での高接・下降が目立たなくなることはない。

カナ・カナーはデスマス体でも普通体でも使える。話者の属性にも関係なく使える（カイナ・イナも同様）。また、疑問語あり・疑問語なし、前に来る語が体言・ノ・活用語終止連体形の、いずれの場合もカナ・カナーが使える。カイナ・イナのような使い分けはない。

2.41.2 カナ・カナーの意味用法について。

- ①疑似問いかけ 2人称主語の疑似問いかけの例がある。但し不定自問との境界は不明確である。
 - ②自問的問いかけ 2人称以外の主語の自問的問いかけの例は見当たらない。2.40の自問的問いかけの項にあげたカイナの用例をカナに置き換えた文も一応言えるが、強い疑いの例をのぞき、カナは、カイナより聞き手の答えを要求する度合いが低いように思われる。
 - ③不定自問 不定自問の例は数多くある。ほぼカイナ・イナで置き換えられる。それとの意味の違いは微妙だが、2.40.2の記述がある程度当てはまる。
 - ④副助詞的用法 この用法はカナ・カナーにはない。
 - ⑤強い疑い・反語 カナ・カナーに反語の用法はない。強い疑いの用法もkyodanwaに用例はない。強い疑いの意では上の世代ではカイナを使うのが普通のようなのである。
 - ⑥不確かな応答 用例があり、使える。述べ立て文に近い「個人的な判断・意見叙述」も、共通語的かもしれないが、言える。
 - ⑦ヤンカナ ×ヤンカナの形はまったく不可である。
 - ⑧あいづち 驚き・感嘆の意味合いが効いた相づちには使用不可である。
- 「と思う」との共起 カナは「と思う」と共起可能である。

連用修飾節的な用法 カイナ・イナと異なり、連用修飾節的に次に続くようにみえる用例がわずかながらある。

2. 4 2 用例：「知らん」「知れん」「わからん」など+疑問の要素 略。

2. 4 3 ヤンの新しい音調と用法—「京都方言の形態・文法・音韻」(1)2.30.2・2.30.3節の補足—

「伝達」(情報提示)のヤンカ類に、以下のような新形が生まれている。「スル」ネン「ヤ」ン「シ」テン「ヤ」ン 例：[友人に話し手が事故を起こしたことを伝える]俺H0、こないだH0「事」故ってんH1「ヤ」ん。このヤンの用法・音調は現在の近畿中央部の若い世代で使用が広がっている模様である。この新形の成立原因として、①従来報告されるスルネンカー・シテンカーはヤンが脱落してしまう語形であるのを回避しようとしたことと、②京都では「伝達」以外の用法ではヤンカよりもヤンが多いので、それに統一しようとしたことがあげられる。

2. 4 4 連用命令・テ形などにつくナとヤ—「京都方言の形態・文法・音韻」(1)2.29節の補足など—

2.44.1 連用命令・テ形などにつく終助詞ナとヤについて、大阪市近辺の中年層の方言を対象にした牧野(2009)の結果と対比しながら記述を行う。

後続語	例	連用命令		テ形命令依頼		命令形命令
		無核	有核	無核	有核	
ゼロ	読	ヨ「ミ」 L0	—	ヨン「デ」 L0	—	ヨ「メ」 L2
ナ	読	×ヨミ「ナ」 L0	ヨ「ミ」ーナ L2	△ヨンデ「ナ」 L0	ヨン「デ」ーナ L3	—
ヤ	読	ヨミ「ヤ」 L0	×ヨ「ミ」ーヤ L2	ヨンデ「ヤ」 L0	×ヨン「デ」ーヤ L3	◇ヨ「メ」ヤ L2

表中、一は牧野(2009)・京都方言ともに不可。×は同論文では可だが、京都の上の世代・中間世代は不可で、下の世代は同世代の男性から聞く。△は同論文では可だが、上の世代は不可、中間世代・下の世代が使う語形。◇(命令形命令+ヤ)は今回の話者4名とも使わないが、男性から聞くことはある。これら以外は同論文・今回の4名がともに使う語形。なお命令形命令単独は使用が稀で、引用の場合などに限って使う。

後続語	例	オ+連用命令			オ～ヤス命令	
		無核		有核	無核相当	有核相当
ゼロ	読	オヨ「ミ	L0	—	—	オヨミ「ヤ」ス L3
ナ	読	××オヨミ「ナ	L0	オヨ「ミ」ーナ	L3	—
ヤ	読	オヨミ「ヤ	L0	××オヨ「ミ」ーヤ	L3	オヨミ「ヤ」ツシヤ L4

この表は同論文に記載のない語形である。「— —」と「××」は話者全員が不可かつ聞かない。「— —」と「××」は同義だが、表7-1と対照するため、記号を使い分けた。オ～ヤス命令は有核しかないが、他の語形との対応から無核相当・有核相当に分けて示した。

牧野(2009)との顕著な違いは、上の世代が、連用形命令・テ形命令・オ+連用形命令について、無核と有核とで、ナ・ヤが相補分布をなしている点である：無核にはヤしか付かず、有核にはナしか付かない。それが下の世代では徐々に崩れてきており、同論文の結果はその下の世代のものに一致する。明治前半・大阪生の落語家を中心の大阪落語.txtも、京都の上の世代と同じ相補分布を示す。京阪両都市とも、早い遅いはあるが類似の変化を起こしている。なお、命令形命令+ヤは大阪落語.txtに数多くの例がある。

新形の由来について。連用形命令・テ形命令・オ+連用形命令のそれぞれについて、有核+ヤは、少なくとも京都の下の世代ではやや男性語的な荒い語形であるから、周辺地域からの流入の可能性がある。無核+ナは、意味用法の穴を埋めるように、テ形命令依頼で発生し、それが連用命令にも広がったものかもしれない。共通語のテ形命令依頼+ネ(例：「読んでね」)の形も間接的に影響を与えたかもしれない。

2.44.2 音調の詳細について。

連用形命令・テ形命令・オ+連用形命令・オ～ヤス命令に付いた場合について。①無核+ヤ：ヤは訓接平坦。高接平坦も可能。②有核+ナ：順接平坦(非上昇)で、他に、高接平坦の音調も不可能ではないが、ナに強めがおかれ、上昇も大きい。これは和らげではなく、相手へ強い押しつけ・念押しの音調である。③無核+ナ(中間世代または下の世代のみが使う)：ナは訓接または高接で平坦。表7では訓接の場合のみを示した。高接平坦は命令を和らげた音調。④有核+ヤ(下の世代のみ聞く形)：順接平坦(非上昇)。高接平坦の音調はほぼ使わないようである。命令形命令+ヤの音調について。順接平坦(非上昇)。他に、高接平坦の音調もあり、これは命令を多少は和らげる。

2.44.3 語形と意味用法との関係について。

連用形命令・テ形命令・オ+連用形命令・オ～ヤス命令の語形と意味用法の関係について、上の世代の結果を、牧野(2009)の枠組に従ってまとめる。同論文との顕著な相違は、無核ナ・有核ヤがないこと(上述)と、有核ナは非聞き手命令が○であることである。

発話機能	無核			有核		
	ゼロ	ヤ	ナ	ゼロ	ヤ	ナ
非聞き手利益命令	○	○	×	—	×	○
聞き手利益命令	○	○	×	—	×	○
依頼*	○	△	×	—	×	○
勧め	○	○	×	—	×	○

同論文によれば、ナは「聞き手に同意を求める」という基本的意味から、*テ形のみ。連用形命令・オ+連用形命令・オ～ヤス命令は依頼の用法なしから、発話機能を<<依頼>><<勧め>>寄りに移動するという。しかし、これは下の世代の無核型に付くナにのみ該当する。上の世代の有核に付くナはそれとは機能が異なり、矛盾考慮型のマーカー(但し意味機能はそれより拡大)と考える。上の世代のヤの機能は今後の課題とする。

2.44.4 kyodanwa の用例。略。

2.45 志向形付くナとヤ

志向形にもナ・ヤが付く。志向形にも無核系列と有核系列があるが、方言形として単独で使うのは無核のみで、有核は単独で使えず、ナ(地域・世代によってはヤも)とともに使うのみ。但し、下の世代の共通語的語形では有核が多く、単独使用も可(その場合サ変はショーではなくシヨーH2、カ変はコヨーL2)。命令の場合と同じく、有核に付くヤ(×ヨ「モ」ーヤ。ヤは訓接平坦)は下の世代のみが、おもに男性から聞く語形。無核に付くナ(△ヨモ「ナ。ナは訓接平坦または高接平坦)は、中間世代以下のみが使う語形。命令との相違点は、無核+ヤの使用がないことである。有核+ヤは周辺部からの流入かもしれない。

後続語	例	志向形			
		無核		有核	
ゼロ	読	ヨ「モ	L0	—	
ナ	読	△ヨモ「ナ	L0	ヨ「モ」ーナ	L2
ヤ	読	—		×ヨ「モ」ーヤ	L2

有核に付くナは、命令の場合と同じく、矛盾考慮型のマーカーと考える。そして、下の世代でのみ、無核型に付くナは、「聞き手に同意を求める」という基本的意味から、一方的な提案ではなく、聞き手の意向をも意識した勧誘となる。ここでもまた、両者の意味機能は異なる。志向形に付くヤについては、使用する話者がいないので記述は略する。

なお、上の世代では、無核+ナ(△ヨモ「ナ。ナは訓接平坦または高接平坦)は使わないが、ナー(高接下降)が後続する例がある：ヨモ「ナー。意味用法の違いは今後の課題である。